

聖書：ピリピ 3：12～16

説教題：目標を目ざして一心に

日時：2017年4月2日（朝拝）

パウロはピリピ書3章で「キリスト・イエスを知ることの素晴らしさ」について語っています。パウロは以前は、この章最初の方で問題にされているユダヤ主義者のように、人間的なものを誇っていました。4～6節にそのいくつかが紹介されています。しかし彼はダマスコ途上で栄光の復活のキリストに出会ってすべてが一変しました。その時、彼は自分が誇って来たものがキリストの光の前ではガラクタのようなものでしかないことに目が開かれ、愕然としました。それらはちりあくた、ふんど、ゴミに等しいものでしかない、と。以来、彼はキリストこそを求め続ける人生へ導かれました。

そんな流れの中で12節に「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません」と記されています。なぜこんなことを彼は言ったのでしょうか。それはピリピ教会の中に「私は完全に達した」と語る人たちがいたからでしょうか。あるいはユダヤ主義者たちがそう述べていたのかもしれませんが。自分たちは割礼を受け、律法の儀式を守り、完全な状態に達したとか、そこに近い者であるとか。私たちはどうでしょうか。さすがに私は完全に達したと皆の前で語る人はいないかもしれませんが。しかし心の中で私はキリスト教のことは大体分かって来た。知らなければならないことはほとんど知っている。残された部分はあとわずかである。そういう意味で完全に程近いところにいるという感覚を持っていることはないでしょうか。しかし本当にそうなのでしょうか。パウロの言葉に聞いて行きたいと思います。

パウロは続けてこう語ります。「ただ捕らえようとして、追求しているのです。」まず注目したいのは「追求する」という言葉です。これはギリシャ語のディオコーという言葉で「追いかける」という意味の言葉です。ライオンが獲物を追いかける時などに使われる言葉です。そしてこれは聖書では「迫害する」という時にも使われています。6節にも「迫害」という言葉が出て来ましたが、そこでも使われています。救われる以前のパウロはキリスト者狩りをするため、まさにライオンが獲物を追うように追いかけていました。国外にまで追跡して行きました。その言葉を使ってパウロは熱心に私は追求していると言っているのです。キリストを益々知ることを追い求めていると。

これはパウロがいつ頃の話なのでしょう。これは彼の回心直後の話ではありません。あるいは青年期の頃の話でもありません。この時の彼は、長い信仰生活を経て、神に大きく用いられて、今や人生の終盤近くにありました。このことは私たちにとって大きなチャレンジではないでしょうか。私たちがしばしば見ることは、信仰を持った直後の人は生き生きとしているということです。それまで知らなかった神を知って喜んでいる。そして神を知ること、キリストを知ることが熱心に追求している。その姿に接して私たちも励まされます。しかしともすると私たちは信仰の年月が経つ内に、その追求の姿勢が弱くなることはないでしょうか。あるいはこのように走って追いかけるというのは若い人たちのすることであって、年齢を重ねて色々分かって来た私には似合わない言葉だと思いませんか。聖書にも精通して来たし、ウェストミンスター信仰基準も理解するようになったし、かつてのように走ってまで求めなくても良いと。しかしもしそうして追求することにおいて止まっているなら、私たちは正しい状態にあるとは言えません。パウロを見てください！彼は「捕らえようとして追求している」と言っています。私たちよりはるかに先を進んでいる彼が、私はまだ捕らえていない！と言っています。これがキリストの素晴らしさを本当に知っている人の姿なのです。私たちの姿は彼と比べてどうでしょうか。

私たちはパウロに学んでどのように歩むべきでしょうか。13節で彼は再び、「兄弟たちよ、私は自分はすでに捕らえたなどと考えるはしません。」と言います。そして「ただ、この一事に励んでいます」と言います。そしてまず彼が言っていること、それは「うしろのものを忘れ」ということです。パウロはここで自分を競技場のランナーにたとえています。ひたすらゴールに向かって集中・専心する人の姿です。ランナーは後ろを気にして振り返る分だけタイムは遅れ、集中力も削がれます。ですから後ろを見たくなる誘惑から自分を守り、ひたすら前進することへ自分を整えなくてはなりません。これはもちろんクリスチャンは一切過去を振り返らないということではありません。今日、招詞で読んでいただいた詩篇 103 篇にも「わがたましいよ、主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」とありました。過去の神の恵みを覚え、記念することはむしろ勧められています。ですからこれは過去を全く忘れるということではなく、前進することに歯止めをかけるような過去に自分を浸らせないということです。具体的にどんなことが考えられるでしょう。その一つは過去に犯した罪あるいは失敗でしょう。信者となる前に犯した罪、また信者となった後に犯した罪。そのことを思い出すと心が苛まされる。その記憶に打ちのめされる。しかしそれを神の前で悔い改め、主の

赦しを頂いたなら、いつまでもそこにとどまっているべきではありません。パウロの場合を考えてみても、彼は神の教会を迫害して来ました。その過去はともすれば彼を打ちのめすものだったでしょう。しかし主はそれを赦し、聖めてくださった。そのことを信じ、感謝して、新しい歩みにこそ向かわなければなりません。

あるいは前進を妨げる後ろのものとして、これまでの業績や感動的なシーンというものもあるでしょう。振り返ってみれば、よくここまで来たものだと思う。数々の恵みの体験をさせられて来た。しかしそこにある誘惑はそこにとどまって自己満足の思いにふけることです。パウロならそのような経験は私たちに比べてはるかにたくさんあったでしょう。そのことで神に感謝するのは良いことですが、そこで今日の前進をやめてしまっただけではならない。パウロはそういううしろのものを忘れるというのです。

そして彼は「ひたむきに前のものに向かって進み」と言います。これはからだを前に伸ばすという意味の言葉です。ランナーが体を前方に傾斜させて一秒でも早くゴールに飛び込もうとする姿のことです。このように取り組むためのカギは何でしょうか。二つのことを述べたいと思います。一つは「目標を目指して一心に」ということです。すなわちゴールに用意されている栄冠の素晴らしさを見つめ続けることです。この「目標」あるいはゴールにある「栄冠」とは何でしょうか。それは9～11節で見て来ましたように、キリストにあって義と認められ、またキリストにあって聖められる聖化のプロセスを経て、最終的に到達する栄化の状態、栄光の状態のことでしょう。そこにはどんな祝福が私たちを待っているのでしょうか。たとえばヨハネの黙示録 22 章 4 節には「神の御顔を仰ぎ見る」とあります。誰もこれまで神の御顔を見た人はいません。Ⅰテモテ 6 章 16 節には、神を指して「近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方」と言われています。その神をついに仰ぎ見る！と言われています。今、私たちはこの地上で、神の光をいくらかでも味わった時、非常な感動と慰めと喜びを体験しますが、かの日にはその神を直接仰ぎ見るのです。それは何という大きな感動と慰めと喜びを私たちにもたらすことでしょう。またその日に私たちはキリストのありのままの姿を見るとⅠヨハネ 3 章 2～3 節で言われています。その日に私たちは初めて栄光に輝くキリストの本当の姿を見るのです。私たちを愛して、そのいのちまでささげてくださった栄光の主を見るのです。そしてその時、私たち自身も、キリストを映し出すような者にされていることを発見すると言われています。Ⅰコリント 13 章 12 節：「今、私は一部分しか知りませんが、その時には私が完全に知られ

ているのと同じように、私も完全に知ることになります。」　このようなゴールで私を待っているものを真に見つめるなら、私たちは後ろにあるものを振り返っている場合ではありません。ゴールに輝く栄冠が私たちの視野に入って来るや否や、たとえこれまでの経験がどんなに素晴らしいものであっても、それに浸っている気分になどなれないでしょう。このゴールにある栄冠の素晴らしさが私たちを前進の歩みへと駆り立てます。

そして私たちがひたむきに前進するために知るべきもう一つの真理は、素晴らしい将来が私たちの行く手にあるだけでなく、すでに過去から私たちの歩みは支えられていると知ることです。私たちはただ自分がキリストを求めて歩んでいるわけではありません。それよりも根本的な事実は、キリストが私たちを捕らえてくださったということです。パウロは12節後半で述べています。「そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」　これは私たち皆に当てはまることです。なぜ私は今日このようにキリストを主と告白し、キリストを礼拝し、キリストを求め、キリストを信じる生活を送っているのでしょうか。それはキリストが私を捕らえてくださったからです。ヨハネの福音書15章16節:「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」　そしてパウロは14節でも、「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠」と言っています。聖書が述べる「召し」は単なる招きとは違います。「召し」とは神の力強い行動のことです。必ず目的へ到達させる力を持っています。実に私たちが今日、この信仰のコースを歩んでいるのは、この神の召しによっています。神が私を救いへと召してくださったから今日の私があるのですし、この神が上へと召してくださっているからこの私でも必ず最後のゴールに達することができる。ある人は神がこのような絶対主権を持って導いてくださるなら、私がどのように歩んでもあまり関係ないのではないか。私のすることなんて小さなことではないかと言うかもしれません。しかしこの手紙の2章12~13節で見ましたように、神の働きは私たちに「志を与え、事を行なわせる」という仕方で働きます。ですからもし私たちが何ら志を持たず、すなわちその気もなく、どうせ神がなさると言って前進することに怠惰であるなら、それは自分には神が働いていないことを自ら証明することにさえなってしまう。むしろこの神の召しという聖書の教えは、私たちに励ましを与え、御心にかなう歩みへと駆り立たせる教理です。もし神の召しがなく、ただ自分の力で取り組んでいるだけなら、どうして私たちが最後のゴールまでたどり着けるでしょうか。きっと途中で挫折し、脱落してしまうに違いありません。しかし素晴らしい事実は神が召していただいている。ここまで導いてくださった神が最後まで導

いてくださる。1章6節：「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」。この教えに立つてこそ、私たちは勇気を与えられて取り組むことができるのです。私たちの地上の歩みには色々なことが起こります。くじけそうな時もあります。しかし神が上へと召している。そのことに基礎づけられて私たちは信仰を告白し、目標を見つめて喜び走る歩みへ進みたいのです。

最後に15～16節のことをパウロは語ります。「ですから、成人であるものはみな」とパウロは言います。面白いのは「成人」と訳されている言葉は「完全」とも訳される言葉であることです。つまり自分はまだ完全には達していないと自覚し、ひたすら前に向かって走る人が完全な人であるということです。もちろんこの場合の完全とは相対的な意味です。ですから新改訳のように「成人」とか「成熟した人」と訳して良いのです。自分は完全に達したと思うのではなく、むしろ不完全を自覚し、完全を目指してひたすら追求する生活をする人。そういう人が神の前での成人なのです。ですからこのような考え方をしましょう！とパウロは言います。その後には彼は「もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、云々」と言います。一見、これまでパウロが語って来たことと違う考え方をしてもいいと彼が言っているように読めなくもありませんが、そういうことではありません。彼が言っているのはマイナーな事柄についてです。パウロはピリピ人たちには友人として語っています。上から命令するようには語っていません。そんな彼らに、あなたがたは私が述べて来たことの全部に100%同意するのではないかもしれないと言っています。その端々では違う考え持つところがあるかもしれない。それについては神の今後の導きに委ねると言っているのです。そしてそうした点に捕らわれることなく、16節で「すでに達しているところを基準として進もう」と勧めているのです。細かい点でいくらか意見の違いがあるからと言って、それが全部解決するまで何もしないというのではなく、知っているところに従って歩むということです。そのようにして進むところにさらなる神の導きと祝福はあるということです。

私たちは自分の歩みを振り返ってどうでしょうか。私たちはやがての日にガラクタであることが判明するようなもののために一生懸命になっていることはないでしょうか。ゴミの山を集めるために自分の人生をささげていることはないでしょうか。またキリストを求めて信仰の道を歩んでいると言っても、その歩みが止まっていることはないでしょうか。後ろばかりを見て少しも前進していない毎日を過ごしていることはないでしょうか。今日の御言葉を読みながら私が思い起こすことの一つは、神学生時代に授業を受

けた渡辺公平先生のことです。先生は当時 80 歳を超えていて、私たちは先生の授業を受けることのできた最後の年代でした。先生には組織神学の人間論、キリスト論、カルヴィニズム研究等を教えていただきました。先生は授業の中でしばしば、キリストは私がこの年になっても、「もっとこっちへおいで、もっとわたしを知る恵みの道を進んでおいで」と私を手招きするように招いていてくださる。私は益々キリストの素晴らしさに魅了されて、手を引かれるようにして進んで行く毎日だ！と顔を輝かせながら証してくださいました。私たちの毎日の歩みは色々あるかもしれません。これまで沢山の恵みにあずかって来たかも知れません。しかしそこで止まってしまってはならない。私たちは常にこのことを思い起こしたいと思います。それは私は栄光に至るコースの上に置かれているということ。そして私は必ずそのゴールへ至る。私を上へと召してくださった神によって、必ずそこへ導いていただける、と。この新しい年度も新たにこの「目標を目指して一心に」私たちも走りたいと思います。さらにキリストを知ることにおいて成長し、さらにキリストに結ばれ、さらにキリストを映し出し、この身を通してキリストを知る素晴らしさを証し、その幸いと喜びを宣べ伝え行く歩みへ進みたいと思います。